

岡田三郎助《水浴の前》

—「理想画」における花の象徴性—

高山 百合 (九州大学)

近代日本の官展を牽引した洋画家岡田三郎助(1869-1939)は、生涯にわたって裸婦像を制作し、とりわけ後ろ姿の裸婦像を探究し続けた。その代表作である《水浴の前》(大正5年、石橋美術館蔵)は、未だ裸体画問題で紛糾する第10回文展に無鑑査で出品された作品である。本作は、西洋美術における裸婦像の受容とその日本化の問題を考える上で重要な作例であるにも拘らず、従来ほとんど研究されていない。したがって本発表では、まず《水浴の前》の制作過程を明らかにするとともに、岡田の先行作例から本作に転用された表現や技法を確認する。さらに、画中に描かれた松虫草の花の意義を考察することを通して、明治期以降の近代洋画における本作の位置づけを試みたい。

本作の主題である右足を軸に左膝を曲げる裸婦のポーズは、フランス留学中にラファエル・コランに学んだアカデミックな裸体画研究の成果だと言える。一方で、あたかもパステル画であるかのように斜線を重ねてモデリングするという穏健な表現がとられた裸婦の肌や、掛軸を想起させる縦長の画面に見られるように、西洋美術の伝統的テーマは日本的「水浴図」へと翻案されている。岡田は本作の背景のために写生旅行に出かけ、そこで得られた下絵に基づき遠景と近景を構成したが、その途上で中景に描く花をめぐる試行錯誤を重ねている。彼は最終的には松虫草を鑑賞者の視点が集中する場所に置き、なおかつ裸婦がその花を見つめているかのように描いた。ここで松虫草が選択されたのは、大正5年の写生旅行に同行し、後に『萬花図鑑』を編むほど花に強い関心を持っていた洋画家辻永や、岡田の妻で作家の岡田八千代らの大正5年の言説において松虫草に関する記述が見られるように、本作制作時に岡田の周辺で関心を持たれていた花であったからである。松虫草は花言葉を通じて森に住むニンフの悲恋物語を象徴するものとして受容されていたのである。そこから、岡田は単なる水浴図を描いたのではなく、松虫草によってその物語を含意させたと推察しうる。

従来の先行研究においては十分に考察の対象とならなかったが、寓意的で象徴的な意味内容を持つ絵画を西洋絵画の正統として受け入れた近代日本洋画のアカデミズムの画家は、花によって何らかの物語を象徴させるという理念もまた受容したはずである。事実、岡田は以後の水浴図にも松虫草を描いており、彼にとって松虫草の象徴性が大きな意味を持ったことが窺える。画中の松虫草に着目すると、絵画には何らかの寓意性や象徴性が込められるべきとする白馬会以来の「理想画」の理念が、大正期の官展アカデミズムを代表する本作にも継承されていたことがわかるだろう。しかし、思想や物語を背景に持たないモダニズムの絵画が台頭し始め、絵画制作の理念が大きく変容を遂げる大正時代において、本作は「理想画」の終焉を予感させつつ、その最後の輝きを放ったのである。